

第3回 仙台 I ソンタクラブ 東北大学大学院
女子学生海外渡航支援事業 報告書

平成 26 年 12 月 6 日 記入

所属部局名：医学系研究科
学 年：博士課程後期3年
氏 名：久保 有美子

1. 渡航先
アメリカ・ワシントン D.C.
2. 参加国際学会等の名称
第44回北米神経科学学会
44th annual meeting of the Society for Neuroscience (SfN 2014)
3. 開催期間
平成 26 年 11 月 15 日 ～ 平成 26 年 11 月 19 日
4. 旅行期間
平成 26 年 11 月 10 日 ～ 平成 26 年 11 月 25 日
5. 発表演題
Differences in responsiveness between methamphetamine, nisoxetine and methylphenidate may reflect specific developmental characteristics in juvenile DAT KO mice
6. 参加した国際学会等の状況並びに感想
今回参加した北米神経科学学会は、神経科学分野では世界最大規模の学会で、80 か国以上から 31,000 人以上の参加者がありました。会期中の D.C.は大変冷え込んでいたものの、街中の至る所に世界中の神経科学者たちがいるというお祭りのような活気に包まれていました。本学会は、5日間の曜日ごとの演題名・発表者等の一覧冊子が、5冊で電話帳のような厚さになるような膨大な発表数で、世界各国からの溢れるほどの最新の研究成果が集まります。一口に神経科学といってもその専門領域は非常に多岐にわたり、全てを網羅することはできませんが、現在の神経科学研究の潮流や、自分の研究分野とその関連研究の最新動向をつかむことができました。また、数多の企業や研究所等の出展もあり、新たな技術や機器類、キャリアアップの情報を得るにもとても充実した環

境でした。

私は、注意欠如・多動症（ADHD）の動物モデルを用いた行動薬理学的研究の成果について発表を行いました。ポスター添付を許された4時間の間、発達障害や、動物モデルという共通分野だけでなく、関連分野以外の研究者の方々も見に来てくださり、成果報告にとどまらず、自分の研究に対する新たな示唆や今後の方向性のヒントも得ることができました。自分の未熟な英語でも、熱心に耳を傾けてくださるの方々のおかげで議論ができ、貴重なご意見も伺うことができました。しかし、研究の細部を詰めていくような話になると自分の英語コミュニケーション能力ではもどかしく感じるばかりで、世界を意識した研究をしていく上では、英語力の向上は欠かせないと改めて痛感しました。また、アメリカで研究をされている日本人の方々には、海外の研究生活についての話も聞かせていただけたので、将来の進路を考える上でも有益なものでした。

世界中にこれだけの（これ以上の）神経科学研究者がいるのかという事実を直に見ることで圧倒されましたが、将来への様々な研究の進展を期待しての昂揚感とともに、日進月歩である研究の世界における競争に対して、常に国外の研究や研究者を意識して研究活動に日々精進していくべきだと再認識し、心が引き締まる思いでもありました。今回、海外で開催された国際学会に参加することができ、多くの刺激を受け、視野が一気に広がる貴重な経験をさせていただいたこと、そして、日本では得がたい、今後の研究生活で相互刺激し合える様々な国の研究者とのつながりを得られたことに感謝しています。この経験を糧に、これからも日々の研究活動に励みたいと思います。

【その他1：学会前後】

渡米できる滅多にない機会でしたので、学会前後の期間に、共同研究先であるアメリカ国立衛生研究所（NIH）の国立薬物乱用研究所（NIDA）や大学にも訪問させていただき、共同研究者の先生方にお会いすることができました。先生方と直接顔を合わせ、有意義な意見・情報交換ができ、じっくりと自分の研究や研究生活へのアドバイスもいただけたことは、学会参加と併せて大きな収穫となりました。

【その他2：子ども連れで参加して】

本学会は家族連れも非常に多く、子ども連れ参加も可能で、興味のあるポスター前にベビーカーを横付けして議論する、まだ首も据わっていないような乳児を抱いてシンポジウムを聴くなどあちらこちらで見かけ、これが当たり前のように許されていることを嬉しく思いました。日本では女性研究者自体が少ないためなかなか見えづらいですが、海外で

は子持ちの女性研究者がたくさん活躍しているという現実にも、大変心強さを覚えました。私は、未就学の子ども2人連れで、レクチャー、シンポジウム、ポスターと渡り歩くため広大な会場を連日歩き回り、大人の足でもへとへとになるほどでしたが、子ども連れで歩いているだけでよく声をかけられ、それによる+ α の人脈を得ることもできたことは予想外の収穫でした。また、あくまで個人的な感想ですが、街中も含めて、アメリカは日本よりも子ども連れに優しい社会という印象を受けました。

7. 本事業に対する要望等

この度は、海外渡航に際して貴事業のご支援をいただき、心より感謝しております。子どもも連れて行かなければならない都合上、旅費も高額で、ご支援がなければ今回渡航することは叶いませんでした。

留学経験のない学生にとって、自身の研究を国際学会で発表することは、国際的視野を持つ上で大変貴重な経験となります。やはりその環境に身を置き、実体験することの大切さを感じました。今後ますますグローバル化が進む中、世界を舞台に活躍できる日本女性が増えるよう願っておりますとともに、そのためのお力添えを継続していただけますようお願い申し上げます。

※ この報告書は、本事業の出資団体である「仙台Iソソクラブ」への事業成果報告として提出します。

※ この報告書は、本学男女共同参画委員会ホームページに掲載します。